

概 要 報 告

実施期日	令和8年8月3日(月)
部 会 名	小学校 生活部会

研究主題 主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善

テーマ 『 「広町探検隊」 から 「広町みんなで守り隊」 へ

～地域と関わり、自分で学び、仲間とつながる～ 』

提案概要

本提案は、学区にある広町緑地公園での体験活動や地域の人々との交流を通して、身近な自然への関心やSDGsの視点を育み、多様な価値観を尊重しながら、よりよい環境を自ら創り出そうとする主体的な態度を育成することを目指した。年間を通して、広町緑地公園での探検・保全・発信の活動を系統的に位置付け、体験を積み重ねながら、地域への愛着や当事者意識を育み、自ら地域の環境をよりよくしていこうとする態度を養うことをねらいとしている。「やってみたいこと」「調べたいこと」を児童自身が選択する自己決定の場を多く設定し、「やらされる学び」から「自ら学びをつくりだすこと」への転換を図った。基地づくりやグループでの調査・発表活動を通して協働的な学びを充実させるとともに、「劇」「映像」「紙（ポスター）」「仕事」など、多様な表現方法を取り入れ、児童一人ひとりの興味・関心に応じた個別最適な学びを実現した。

○単元構想と活動内容

第1次（5月）	広町緑地公園での自由散策や遠足を通して自然の魅力に触れ、多様な気付きを得た。また、アオリイカの産卵床づくりを体験し、地域の自然を守る人々の思いや取組みに触れることで、自然環境への関心を深めた。
第2次（6～10月）	基地づくりと夏探し・フィールドワークとして、段ボールや自然素材を活用した秘密基地づくりを行うとともに、「鳥」「虫」「川」「地図」「仕事」などのテーマ別フィールドワークを実施した。
第3次（11月）	秋探し・表現活動として、運動会では創作表現「広町の森の妖精たち」を発表し、自然の特徴や魅力を身体で表現した。
第4次（12月）	児童の意識の高まりを受け、「広町探検隊」から「広町みんなで守り隊」へと活動を発展させた。学年を4グループに編成し、広町緑地公園で落ち葉拾いや木道のコケ取りなどの保全活動に取り組んだ。
第5次（1月）	プロジェクト学習を本格化させた。広町緑地公園スタッフによる出前授業を通して、開発計画から広町が守られてきた歴史を学び、「劇」「映像」「紙・ポスター」「仕事」の4つの領域に分かれて探究活動を進めた。
第6次（2月）	劇や映像、ポスターを通して、地域への発信活動を行った。保護者や地域の方々に向けた劇の発表や、映像CMのSNS・ケーブルテレビ局での放映、西鎌倉駅でのポスター掲示やチラシ配布を行った。また、広町緑地公園での実践的な保全活動を継続して行った。
第7次（3月）	校内で「広町発表会」を開催し、1年間の学びを振り返った。また、1年生への活動の引き継ぎや田んぼでの田起こしを行い、次年度へ学びをつないだ。

○成果と課題

成果	課題
・広町緑地公園を単なる遊び場ではなく、「自分たちが守り、次へつなぐ大切な地域の財」として捉え直すことができた。 ・地域住民や保護者との交流や発信活動を通して自己効力感が高まり、「世界の自然も守りたい」といった、身近な環境だけでなく地球規模へと視野を広げる児童の姿が見られた。	・学年全体で取り組む大規模なプロジェクト学習を進める中で、児童一人ひとりの思いや活動を十分に支えるための、よりきめ細やかな支援体制や指導の工夫が必要である。

協議の柱及び協議概要

1 子どもの「やりたい」をどのように尊重し、学びにつなげるか

子どもの願いを尊重したいという思いは共通しているものの、時間や人的環境、地域との連携など、さまざまな制約もあり、その実現には教師による意図的な環境づくりや丁寧な支援が欠かせないとの意見が多く出された。教師が学習の方向性を示しながら、子ども自身が選択・決定できる場面を保障することが、主体的な学びにつながるという共通理解が得られた。また、子どもの「やりたい」を引き出すための環境づくりこそが教師の重要な役割であることが確認された。

2 地域の財を生かした生活科の在り方

地域にある自然や人、文化などの「地域の財」をどのように生活科の学びに活かすかについて協議が行われた。地域資源が豊富である一方で、毎年同じ活動を繰り返すことで教師・児童双方にマンネリ化が生じる可能性も指摘された。

そのため、地域の財を固定的な教材として扱うのではなく、その年の子どもたちの興味や願いを踏まえて活動を再構成することが重要であるとの意見が出された。また、地域と継続的に信頼関係を築き、多様な人々と関わる学びを積み重ねることが、生活科の学びをより豊かなものにしていくことが確認された。

3 これからの生活科の理想について

「どのような生活科の授業が理想か」という視点からも意見交換が行われた。子どもが思い切り遊び、じっくりと自然や人との関わりを味わう経験を十分に保障することが、主体的な学びの出発点となることが共有された。今回の実践でも、活動の初期段階で十分に自然と触れ合う時間を確保したことが、その後の継続的な学習意欲につながっていた点が高く評価された。

また、児童の「やりたい」を持続させるためには、教師による綿密な単元構想や学習計画が重要であること、学年全体で共通理解を図り、それぞれの得意分野を活かしながら協力して実践を進めることの大切さについても意見が交わされた。

まとめ概要

本実践では、「広町緑地公園」を舞台に、子どもたちの「やりたい」という思いを出発点とした学習を年間通して展開した。探検・保全・発信の活動を積み重ねる中で、広町緑地公園を単なる遊び場ではなく、「自分たちが守り、次の世代へ受け継いでいく地域の財」として捉え直し、「広町の魅力を多くの人に伝えたい」という願いを実現する姿が見られた。また、地域住民や保護者との交流や励ましは、児童の自己効力感や自己有用感を高め、自ら考え、行動しようとする意欲を育む大きな支えとなった。一方で、学年全体で進めるプロジェクト学習では、児童一人ひとりの思いや学びを丁寧に支える指導体制や支援の在り方について、今後さらに検討を重ねていく必要があることが確認された。